

原 著

## ウォルター・ラウシェンブッシュと社会福祉 — 社会的福音の観点から —

金丸 英子\*

### <要 旨>

近代アメリカ・プロテスタント教界を代表するウォルター・ラウシェンブッシュ(Walter Rauschenbusch, 1861-1918)の代表的な著作、『*Christianity and Social Crisis*』(1907年出版)から、ラウシェンブッシュが唱導した社会的福音において、社会福祉がどのように捉えられていたかを探る。また、ラウシェンブッシュの主張の中に、キリスト教の使信と社会福祉理念を切り結ぶ哲学的な接点を見出してゆき、キリスト教主義大学で福祉を学ぶ人たちにキリスト教から提供しうる視点を模索する。

キーワード：近代アメリカ、自由主義神学、社会的福音、社会福祉の精神

序

19世紀末から20世紀初頭のアメリカ・プロテスタンティズムの主流は自由主義神学であった。社会的福音はこの神学的文脈から派生したものである。が、しかし、社会的福音の誕生は、単にアメリカという特定の土壌のみに依拠していない。当時のイギリスを含むヨーロッパ諸国の「社会的キリスト教」とよばれる思想にも少なからぬ影響を受けた事実は、今日、研究者の一致する見解である<sup>1)</sup>。

自由主義神学の思想的特徴は、個人主義への傾斜である。この傾向は、当時のキリスト教会の社会的関心の持ち方にも微妙に影響している。自由主義神学を奉じた19世紀のプロテスタント教会は、社会的関心を慈善事業や個人の道徳・倫理の改善に集中させる嫌いがあった。社会的福音も同様に、人間の倫理や道徳に対して強い関心を持つてはいたが、自由主義神学と異なる点は、キリスト教あるいは教会の使命とその働きを個人的な生の領域に留めることはせず、それを超えた社会的な広がりの中で捉えようとした点である。即ち、教会とキリスト教の価値や責任を、社会問題と向き合う中で問うたのである。19世紀のアメリカ・キリスト教界において、神学者ウォルター・ラウシェンブッシュ(Walter Rauschenbusch, 1861-1918)は、社会的福音を代表する人物である。教会が社会的な問題に関わる際、ラウシェンブッシュは、伝統的にキリスト教会が目的に掲げたキリスト教人口拡張のための、いわゆ

る「慈善事業」的姿勢を否定し、社会におけるキリスト教並びにキリスト教会本来の使命(ミッション)の受肉として理解した。社会的福音の主張もこの点に主眼が置かれ、提唱・実践された。

本稿では、ラウシェンブッシュの代表的な著作、『*Christianity and Social Crisis*』(1907年出版)から、ラウシェンブッシュが唱導した社会的福音において、社会福祉がどのように捉えられていたかを探りたい。その理由は、筆者自身、社会福祉の働きを職業とすべく選択した若い人たちに、キリスト教を教える現場にあるからに他ならない。キリスト教の使信と社会福祉理念の哲学的な接点を見出し、キリスト教主義大学で福祉を学ぶ若い人たちにキリスト教の立場から提供できる視点を模索したい。この小論は、その模索へ向けての小さな一歩に過ぎない。

### I. 社会的福音の登場：ラウシェンブッシュ以前

アメリカ国内で社会的福音が台頭し始めたのは、南北戦争後、1890年代から1910年代にかけてのことであった。その時期、社会では、国内の工業化と産業化の結果として、都市の貧困・道徳の腐爛・経済的不均衡等が、社会問題として形をとって突出していた。このような中、社会的福音は、キリスト教の福音の視点から、イエス・キリストの教えを個人的な魂の救済というプライベートな領域だけに留めず、社会的不公正に異議を唱え、自らの社会的責任として現存する社会

\* 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 講師

問題の解決に取り組むよう訴え、社会改良運動の実践を目的とした。

今日、研究者は一様に、ラウシェンブッシュこそがその社会的福音の代表的指導者であるという<sup>2)</sup>。が、しかし、アメリカ・キリスト教界における社会的福音の価値と貢献を単にラウシェンブッシュ個人の資質にその要因が帰されるべきではない。ラウシェンブッシュの主張と活動が開花する土壌は、それ以前の先達によってすでに耕され、準備されていたと見るべきであろう。例えば、オハイオ州の会衆派牧師ワシントン・グラッデン (Washington Gladden, 1836-1918) は、かなり早い時期から自由主義神学を聖書解釈の方法論として用い、イエス・キリストの教を社会倫理の面から再吟味した人物の一人である。その結果を複数の書物にまとめて出版し、広く世に受け入れられた<sup>3)</sup>。グラッデンが牧師として、教会の現場から社会的福音を提唱した指導者であるとすれば、ユニテリアンの牧師であり、ハーバード大学の神学教授であったフランシス・G・ピーボディ (Francis G. Peabody, 1847-1936) は、将来、教会のリーダーとなる牧師を養成する神学教育機関を自らの活動の場とした。ピーボディは、学生としてハーバードで教育を受け、ドイツのハレ大学に留学した。その後、母校に教授として迎えられると直ちに、キリスト教社会倫理をカリキュラムに入れるよう大学に働きかけ、自らその教鞭を取った。これは、アメリカの神学教育機関で最初の試みであった。ピーボディは担当講義のほか、自らのチャペル講話やキリスト教社会倫理に関する小冊子を多く出版した。このような精力的な学問的活動は、結果として、ハーバードの外にも多くの支持者を持つようになった。

グラッデン、ピーボディらの社会的福音思想を実践に向けて牽引し、キリスト教会の共働活動へと展開したのは、オハイオ州の会衆派牧師ジョサイア・ストロング (Josiah Strong, 1847-1916) であった。今日に至るまでストロングの著書『Our Country: Its Possible Future and Its Present Crisis』は、19世紀の最も影響力のある社会的福音の書物に位置づけられている。ストロングは、キリスト教諸派の違いを超えてその力を束ね、キリスト教界が一丸となって社会問題の改善に取り組む必要を痛感。そのための団体を自分の教会内に開設し、各地から著名な講演者を招くことによって、牧師ら聖職者だけではなく一般信徒にも教会の社会的使命の啓蒙に尽力した。事実、このようなストロング抜きには、後年、社会的福音が運動として社会に貢献する道は開かれなかったと言ってもよい。

以上に代表されるラウシェンブッシュ以前の人々の活動は、19世紀前半に多く見られた。その当時、社会的福音の意義を認め、率先して唱導したのはわずかに握りのキリスト者たちであったが、社会的福音に対するそのような状況は、ラウシェンブッシュの登場後も後退したわけではない。そういう意味でラウシェンブッシュが、「孤独な預言者」と呼ばれるのも無理からぬことであった<sup>4)</sup>。

社会的関心とその取り組みが比較的希薄であった19世紀の自由主義神学は、20世紀に入るとしばしば、社会的福音の同義語として理解されるようになった。とりわけ、1890年から1910年の20年間にはその傾向が著しい。それは、ラウシェンブッシュが活動した時期と無関係ではなかった。ラウシェンブッシュは社会的福音を掲げて、19世紀後半から20世紀前半にかけて、アメリカ・プロテスタント神学を席卷し、教会にも多大な影響を与えたからである。

## II. ウォルター・ラウシェンブッシュと社会的福音

### 1. 生涯と活動

ラウシェンブッシュは、1861年、ニューヨーク州ロチェスターに生まれた。父はドイツ移民のために働く宣教師であり、同時に、ロチェスターのバプテスト神学校で教鞭をとる学究でもあった。ラウシェンブッシュは、アメリカン・バプテストの信徒として信仰生活にはいった。高校時代はドイツで過ごしたが、それ以外はすべて地元ロチェスターで生活し、大学、神学校を終了した。その後、1886年から1897年までの11年間、ニューヨーク市街のドイツ人バプテスト教会の牧師として働くことになる。この時の経験が、後にラウシェンブッシュを社会的福音の唱導者にしたと言っても過言ではない。その後、1897年より、父親と同じようにロチェスターのバプテスト神学校で、教会史担当教授として教壇に立った。

ラウシェンブッシュが牧師をしていた地域は、当時、「地獄の台所 (Hell's Kitchen)」と呼ばれ、ニューヨーク市街の中でも産業化による都市社会の弊害で最も荒み切った場所だった。そこで牧師ラウシェンブッシュの目に映ったのは、その地域の住人たち、とりわけ男性が、職や衣服だけではなく、希望を失って路上に溢れかえる姿であった。そこでラウシェンブッシュがまず着手したのは、子供たちの遊び場作りと住宅環境の改善であった。友人のバプテスト派牧師たちと共に小さな奉仕グループを作り、次第にその輪をバプテ

スト以外の牧師たちにも広げた。「神の国の兄弟会(the Brotherhood of the Kingdom)」と命名されたこの奉仕グループは、その後、その活発な活動と影響力により、1893年から1915年にかけて、全国的に知られるまでに発展した。その発起人として、ラウシェンブッシュの名もまた、知られるようになった。

ラウシェンブッシュの活動領域は、「神の国の兄弟会」に代表される実践的な活動に留まらず、旺盛な執筆活動にまで及んだ。都市化社会における教会の使命を追求する中で、ラウシェンブッシュの社会的福音の思想は深化してゆく。2冊の著作がラウシェンブッシュを社会的福音の旗手に押し上げた。その内の1冊は、1年間のドイツ遊学を経て1907年に出版された『*Christianity and the Social Crisis* (キリスト教と社会危機)』である。これにより、ラウシェンブッシュは、社会的福音運動のリーダーとして一躍国内の注目を集めた。それから10年後、2冊目の『*A Theology for the Social Gospel* (社会的福音の神学)』を出版。それまで社会的福音は、教会の慈善活動の一部として捉えられ、また、その実践的な特徴ゆえにアカデミズムから疎んじられた面もあったが、これら2冊の書物は、そのような従来の固定観念に風穴を空けるものであった。とりわけ、『*A Theology for the Social Gospel*』は神学者たちにもインパクトを与え、ラウシェンブッシュはエール大学など、当時の第一級の高等教育機関から講演に招かれるまでになった。

ラウシェンブッシュの影響は、更に広がりを見せるようになった。社会的福音によってアカデミズムと社会実践の接点に関心を寄せるようになった大学や神学校が、自らのカリキュラムの再編に取り組み始めたのである。例えば神学校の場合、従来の開講科目を可能な限り統合・縮小し、その代わりに社会倫理が新しくカリキュラムに組み入れられた。そのカリキュラムの下、神学生たちは、夏休みのまとまった期間、市街地に送り出され、そこで都市問題を実際に経験する「現場実習」を課す神学校が出て来るようになった<sup>5)</sup>。

このような聖職者養成の高等教育機関の変化は、神学校から卒業生を牧師として迎える教会にも及んだ。新しい神学教育を受け、教会の社会的使命に目覚めて赴任した牧師たちは、プロテスタント諸教派の教会に散らばってゆき、赴任した教会に社会的関心を喚起した。また、社会のニーズに応じて教会活動を推進する目的で、社会問題に実際に取り組む部門を自らの教派に設置するように努めた。アメリカ・プロテスタント教会によるセツルメント開設は、このようにして始まっ

た。その働きは教派の壁を超え、他教派との協力を生み出し、そのための団体が作られた。1908年、「アメリカ・連邦キリスト教会協議会」(The Federal Council of the Churches of Christ in America)創設は、その典型的な例である。この創設目的は、当時の社会問題、とりわけ産業化によって表面化した社会問題に取り組むためであったが、その精神と活動は現在の全米キリスト教協議会(The National Christian Council of America)に引き継がれている。

## 2. 社会的福音を支えるもの：「神の国」の使信とラウシェンブッシュ

アメリカ・キリスト教史にあつて、ラウシェンブッシュは、自由主義神学者にも社会的キリスト教の唱導者の範疇にも納まらない、ユニークな存在として位置づけられている。前者に関してはすでに触れているので、ここで改めて繰り返さない。後者の関連では言えば、現存の社会機構や政治体制に対する鋭い批判を向け、社会的不公正の是正に献身したラウシェンブッシュが、終始、伝統的キリスト教と関係を持ちつづけ、イエス・キリストの福音の伝播と、イエスの教えを实践する情熱を絶やすことがなかったという点である。これは、従来教会が伝統的に踏襲してきた「より多くの人々を教会に取り込む」ための、いわゆる「キリスト教伝道」ではない。ラウシェンブッシュの方向は、その逆であった。病んだ社会に、教会が何を提供できるか。そのような社会の中に立つ教会の使命(ミッション)はどうあるべきかを、イエス・キリストの生涯と教えから真摯に模索しようとしたためであった。ラウシェンブッシュは、神学校というアカデミズムの世界に身を置きつつ、自らの学問がいわゆる「象牙の塔」の学問に化さなかったのも、この方向性と無関係ではないであろう。神学校に招かれるまでの11年間、ラウシェンブッシュは、当時、最も過酷な社会環境を擁する地域の牧師であったが、その経験を教会史家という学究的な目で再解釈したためではなかったか。

それを裏付けるかのような社会分析が、『キリスト教と社会危機』に見て取れる。このような作業を経てラウシェンブッシュは、社会問題を安易に看過してしまう教会の問題性とその根を詳らかにし、社会におけるキリスト教や教会の果たすべき役割と取るべき責任を提示した。『キリスト教と社会危機』は、全7章で構成されている。そこには一貫して、旧約聖書の預言者を彷彿させるラウシェンブッシュの、教会に対する使命の喚起と警告が散りばめられている。ラウシェンブ

シュは、社会にあって宗教と倫理は分離し難く一つであり、これら両者が切り離されてしまえば、宗教は単なる自己保身と社会体制の維持を支える原理となり、そのような社会は非人間的になるであろうと述べる。ここでは、当時の産業化社会における人間疎外の問題が前提とされている。ラウシェンブッシュは、次のように述べる。

キリスト教は今日の産業化社会が生み出した物質主義や拝金主義に対して発言し、行動すべきである。もし、より高額給与を得るために自分自身の人間としての尊厳を犠牲にし、知的成長や人間的な友愛の発露を妨げるならば、その時、人はすでに拝金主義に陥り、神を否定している。また自らが富むためには同僚を利用したり痛めたりすることを選択する者も同じである。今や、人間はより多くの製品を生産するためにモノとして遇されている。生産のための手足として雇用されているのであって、人格を備えた人間としてではない<sup>6)</sup>。  
(傍点筆者)

人間疎外の問題に対するラウシェンブッシュの視点を支えるものは、新約聖書の「神の国」の教えから来ている。キリスト教の「神の国」の教義は、イエス・キリストが救い主として公生涯を始めた際、最初にのべたと伝えられる「神の国は近づいた」(マタイ3:1-2、マルコ1:14-15、ルカ4:43)の教えに依拠している。新約聖書には、イエス・キリストの教えと生涯を伝える福音書が4つある。最も古いマルコによる福音書、その後、同時代に書かれたと推測されるマタイによる福音書、ルカによる福音書、そして最も後になってまとめられたヨハネによる福音書の内、ヨハネによる福音書以外の3つの福音書は「共観福音書」と呼ばれ、同じ資料に基づいて書かれたと言われている。そうして、この共観福音書にはどれも、イエス・キリストが公生涯を通じて神の国をのべ伝えたことを記している。

イエス・キリストは、「神の国」をどのように捉えていたであろうか。まず、「神の国」を人間の死後や世界崩壊の後、初めて訪れるものとは見ていなかった。また、当時のユダヤ人が考えていたような地上的・政治的な統治とも考えなかった。イエス・キリストが伝えた「神の国」は、神の愛が支配し、満ち溢れる「領域」を指している。個人を超えてすべての人に関わりを持つ神の支配を「神の国」と捉えたのだ<sup>7)</sup>。そのような神の支配とは、愛なる神の支配であるが、それが人

間存在の根底に今・この時・すでに脈々と流れて溢れているという現実こそが「神の国」であるという捉え方である。従って、「神の国は近づいた」という教えは、イエス・キリストの人間観・世界観そのものであった。ラウシェンブッシュが、神の国の教義を「それ自身で社会的福音である」と繰り返し語ったのはそのためであろう<sup>8)</sup>。

ラウシェンブッシュの「神の国」観は、第2章「The Social Aims of Jesus (イエスの社会目的)」に詳しく展開されている。ラウシェンブッシュは、「神の国」の教えこそがイエス・キリストのすべて教えの中心であり、人々へのイエスの愛と癒しの働きそのものが神の国の到来を告げるものであったとする。加えて、この「神の国」の教えを通してイエス・キリストは、一個人の救いに留まらず、社会的有機体(社会)の救いまで視野を広げていると説明する。

ラウシェンブッシュは「社会的有機体の救い」を、イエス・キリスト自らが体現した神の愛を基盤とする社会へと改善するという意味で捉えている。ラウシェンブッシュにおいては、個人の救いと社会全体の救いは表裏一体であり、分離して考えられてはいない。ラウシェンブッシュによれば、イエス・キリストは、個人を社会から切り離して捉えず、人間が社会と正しい関係に置かれる時に初めて倫理的存在となり、逆の場合には人間倫理の腐敗に陥ると考えていた。ラウシェンブッシュは、このようなイエス・キリストを解釈して、イエス・キリストのメッセージを、「すべて人間的に善なるものは、社会的善でなければならない」との点に集中させている<sup>9)</sup>。ここには、当時の自由主義神学の個人主義への傾きは退けられ、また「個か、全体か」という二者択一的に対立した価値の枠組みも後退している。個と全体(社会)を有機的な関係に置き、そのどちらが欠けても人間社会の歪みが改善されえないことが示唆されている。

ラウシェンブッシュは、社会の質を左右するものは「愛」であり、「愛」こそが社会存立の基盤であると言う。なぜなら、愛は交わりを生み出し、共なる生を要請する。愛のあるところには、強制や義務による行為はなく、真の人間的な友愛があるからである<sup>10)</sup>。ここで考えられている「愛」とは、当然ながら、イエス・キリストが体現した神の愛である。ラウシェンブッシュは、イエス・キリストの教えの中心をなす「神の国」は、神の愛の溢れる領域を指すゆえに、この場合の愛を情緒的、情念的な愛と区別して、人間と人間の間「共生を創り出す最も高く、確固とした意思のエネル

ギー」と定義した<sup>13)</sup>。もし、社会が力による強制、搾取、不均等を基盤として立っているならば、その対極にあるものとして、人間愛、互いに仕え合い助け合ひ思い、平等を基盤とした社会こそ、神の国に相応しい社会であり、そのような社会を作り出そうとしたのがイエス・キリストであったと続ける。ラウシェンブッシュは以上のようにイエス・キリストの教えと生涯を読み取り、その上で次のように述べる。

イエスは「人は一匹の羊よりも価値ある者ではないか？」と問うた。それに対して今日の社会は、「否」と答える社会である。生活の蓄えと組織を維持しようとすればするほど、そこで労働する人間は軽視され粗末に扱われる。(中略)人間はまず、人間であり、仲間であり、人間社会の一員である。そのような人間を単に「労働力」としてしか見ないとすれば、それは文明化された野蛮主義であり、かつ搾取者側の論理である。(中略)国の繁栄は、生産された製品によってではなく、国民の福祉によって量られるべきである。(中略)宗教は、人間に、体よりもたましいに、給与の多寡よりも人間の尊厳に価値を置くようにと教える。同様に、社会にも教える。富の蓄積よりも国民生活の豊かさに価値を置くようにと。(中略)宗教を持つものはその信仰から勇気を得、「人はパンだけで生きているのではない」こと、神と隣人と共に公正のうちに生活することこそが、神の意思を行なうことであることをはっきりと声にすべきである<sup>12)</sup>。

おわりに：ラウシェンブッシュから学んだこと

阿部志郎(横須賀基督教社会館館長、神奈川県立保健福祉大学学長)は、『福祉実践への架橋』(海声社、1989年)の中で、近代プロテスタントイイズムと社会福祉の関係の関係を次のように述べている。

キリスト教がセツルメントと直接関係があるわけではない。もっとも、キリスト教の歴史において、セツルメントはユニークな社会的実践であると、筆者は考えている。その理由を述べれば、セツルメントは、知識階級の労働階級に対する社会的罪の表現であるが、その背後には個人の宗教的罪の告白があり、罪の贖いとしての実践であったこと。もう一点は、キリスト教の歴史において、教派を超えた協同の業が成立するのは1910年のエディンバラ宣教会議以後になるが、それに先立つ30年前にセツルメントで超教派の協力が実を結んでいること、しかも、それが伝道を目的とせず、あくまでサービスに徹したことに注目するからにはほか

ならない。」<sup>13)</sup>(傍点筆者)

ここで阿部は、近代西欧世界における活発な社会福祉の実践の背後には、キリスト教の影響が色濃くあったことを示唆すると共に、キリスト教精神に裏打ちされた社会福祉の働きが、「伝道を目的とせず、あくまでサービスに徹した」との傾聴すべき指摘をしている。キリスト教の社会福祉に対する関心と実践が、信者獲得や社会におけるキリスト教勢力拡張のためではなく、キリスト教の使信の中心である「隣人に仕えること(サービス)」をその究極の目的に据えたという意味である。社会事業としての福祉の対象とその実践は、「貧困とか疾病という社会病理現象ではなく、貧困に悩み疾病に苦しむ人間そのものであり、その人間に人格的に対応すること」である(傍点筆者)<sup>14)</sup>。このような実践の核には、石井十次が確信したように、実践を支え実践を導き出す「精神」が不可欠であると言える<sup>15)</sup>。この石井の主張と既述の阿部の主張から、社会福祉とキリスト教を結ぶ或る点を覗うことができるように思う。社会福祉を考える時、そこには人間が中心に据えられるべきこと。また、キリスト教は社会福祉と直接的な関係はないものの、社会福祉の働きの対象者としての人間を理解する視点を支える部分で、キリスト教の存在とその影響は看過できない、という点である。キリスト者であった石井が、社会福祉の実践を支え導き出す「精神」を、自らのキリスト教信仰に求めたことは想像に難くないと思われる。ラウシェンブッシュの場合、キリスト者としての人間観・社会観の基盤であり、かつ、実践を導き出した「精神」は、イエス・キリストが伝えた福音とその福音の受肉としてのイエス・キリストの生涯であった。その中でもとりわけ、イエス・キリストの「神の国」の教えは、ラウシェンブッシュの社会的福音の思想を支えたものであり、社会事業としての福祉の接点でもあったと言える。

キリスト教は、神が世界の創造主である、と告白する。神は自らの創造物すべてを見、「極めてよかった」と言われた(創世記1:31)。神が創造したゆえに、人間も世界も元来「よい」ものである。神がこのように「よし」とされたその人間と社会の根本に、すでに「神の国」が来ており、現実世界の在り様にかかわらず、そこに神の愛と恵みが溢れ出ている。この告白が、キリスト教的世界観の根底を流れている。イエス・キリストが生涯、十字架で自らの命を与えるほど深く人格的に人間と関わり、愛し抜いた根拠もここにある<sup>16)</sup>。それゆえ、イエス・キリストの「神の国」の教えを広く世に向かって唱え、実践することは、教会やキリス

ト教の本来的な役割である。

ラウシェンブッシュは『キリスト教と社会危機』の中で、教会とキリスト教が隣人に「仕える」ために存在することを繰り返し強調し、「教会は自己のために存在しない。教会はただ、個々人の内にキリスト教的生をつくり、人間社会に神の国を建設するためにある団体である」<sup>17)</sup>、と述べる。これは、キリスト教が、自己目的や自己保身のために存在すべきでないことを教えるものである。イエス・キリストは、人間が他者のためにあり、他者に仕えることをもって神の被造物としての本分を発揮できるということを自らの体をもって示したといえる。それに倣って、教会やキリスト教は、自己保存のために存在してはならず、「ひとりの人の中にキリスト教的生をつくり、人間社会に神の国を建設するためにだけに存在する」。この使命と情熱が、ラウシェンブッシュの社会的福音の柱であった。ここに、社会福祉に対してキリスト教が提供し得る人間観と社会観が映し出されているように思う。

阿部は、社会福祉におけるキリスト教の働きは、自己目的ではなく、徹底した隣人へのサービス（仕えること）であり、かつ、人間の内面に深く関わる罪告白の発露としての社会的実践であった、と述べる。石井は、社会事業としての福祉の対象と実践は、人間を人格と見、人格としての人間に対応することである、と述べる。そうであるならば、「人間とは何か」、「人間の人格とは何か」、その人間を「人格として見、対応する」とはいかなることか、「人間が人間に仕えるとは何か」など、これら極めて本質的・実存的な問いが問われなければならない。加えて、人間が人格として遇され、扱われる社会は、実際にどのような社会であるべきか。そこで社会福祉の働きは如何なる視点で行なわれ、その結果として、どのように社会に貢献できるのか。このような問いもまた問われ、模索されなければならない。この営みにキリスト教も参与し、キリスト教的なものの方・考え方を提供しながら、福祉を学ぶ人たちと共に考え、模索してゆくことは、キリスト教主義大学において許されもし、また不可欠であると思う。ラウシェンブッシュが社会的福音で展開した人間観・社会観は、そのよき水先案内となることを確信する。

## 註

1) 19世紀後半、西ヨーロッパでは産業革命や都市化に主原因をもつ社会問題が表面化。それにより、社会的キリスト教と呼ばれるキリスト教を基盤にした様々な社

会運動が出てきた。その中でもとりわけ、F・D・モーリス(F. D. Maurice)、C・キングスレー(C. Kingsley)、H・S・ホーランド(H. S. Holland)等は英国国教会の関係者であり、指導者であった。これら英国の指導者は、アメリカの社会的福音の誕生に大きな感化を与えた。

- 2) その代表的な発言は以下を参照。Sydney E. Aholstrom, *A Religious History of the American People* (New Haven: Yale University Press, 1972), 785. Winthrop S. Hudson, *Religion in America* (New York: Macmillan Publishing Company, 1987), 291.
- 3) 社会的福音に関するグラッデンの主な著作は、*Tools and the Man* (1893), *Social Salvation* (1902)。グラッデンは、これらの内容をエール大学で講演する機会に恵まれた。
- 4) Sidney E. Aholstrom 著、児玉佳典子訳『アメリカ神学思想入門』、教文館、1990年、106。
- 5) Hudson, *Religion in America*, 292.
- 6) Walter Rauschenbusch, *Christianity and the Social Crisis* (New York: The Macmillan Company, 1912), 369.
- 7) 東京神学大学神学会編、『キリスト教組織神学事典』(教文館、1983)、33。
- 8) Aholstrom 著、児玉訳『アメリカ神学思想入門』、109。
- 9) Rauschenbusch, *Christianity and the Social Crisis*, 67。
- 10) 上掲書、67。
- 11) 上掲書、68。
- 12) Rauschenbusch, *Christianity and the Social Crisis*, 370。
- 13) 阿部志郎、『福祉実践への架橋』(海声社、1989年)、9。
- 14) 上掲書、159。
- 15) 明治期に岡山孤児院を創設し、我が国孤児院事業に先鞭をつけた石井十次(1865-1914)は、「精神あれば方法は自然にあるものだ」と言ったという(阿部志郎、『福祉実践への架橋』、155-159参照)。
- 16) 滝沢克己、『聖書入門—マタイ福音書講義：第一巻、イエスの生涯』(三一書房、1986年)、206-210。
- 17) Rauschenbusch, *Christianity and the Social Crisis*, 185。

Walter Rauschenbusch and Social Work  
— From His View of the Social Gospel —

Eiko Kanamaru

< Abstract >

Walter Rauschenbusch (1861-1918) is one of the leading theologians who represented modern American Protestantism. From his *Christianity and Social Gospel* of 1907, that made him a champion of the social gospel movement, I examine how Rauschenbusch treated social welfare in his theology. Rejected a traditional approach of Christian churches to social welfare of his days that mainly aimed at gaining more Christian converts, Rauschenbusch believed that the social gospel was the incarnation of Christ's mission and Christian churches should faithfully follow it. By studying his theology of the social gospel, I explore a philosophical point that links the Christian message with the idea of social welfare. This study will provide students, who are pursuing their career as social welfare specialists, a chance to connect their learning of Christianity and of their own expertise. I hope that this paper, despite short and small, could contribute somehow to a large and profound question above.

keywords: Modern America, Liberal Theology, Social Gospel, Heart of Social Welfare